

「長享二年七月八日宗匠家続百首和歌」をめぐって

— 飛鳥井家歌人和歌資料考 —

稲田利徳

一

飛鳥井家は「新古今集」の撰者雅経を祖とする堂上羽林家である。元来は蹴鞠の家であったが、累代有力歌人を輩出、しだいに歌道家としての地位を確立してゆく。

雅経は関東に下って、源頼朝・頼家の信任を得るとともに、後鳥羽院から、嗜れて「新古今集」の撰者の一人に抜擢され、歌道家の基礎を築いた。

その後、教定、雅有、雅孝、雅家らの歌人が、飛鳥井家を継承していったが、なかでも雅有は、古典の教養深く、「春の深山路」ほかの紀行文や日記、「隣女和歌集」なる家集を残し、永仁元年には為世らとともに、伏見天皇から勅撰集の撰者に任命されるほどの有力歌人であった（但し、この勅撰企画は挫折）。

さらに雅家の子息雅縁（宋雅）は、足利將軍家の義満・義持などの信任を得て、広範囲な歌壇活動を展開、飛鳥井家の歌壇的地位の向上に尽力、二条・冷泉とともに有力な歌道家としての立場を確立した。

雅縁の子息雅世も、父の築いた地盤を足場として、足利義教の寵臣となり、遂には二条・冷泉の歌道家歌人をおさえ、「新統古今集」を単独で撰進するという榮譽を獲得するにいたる。

さらにその後を受継した雅親（栄雅）も、義政より勅撰集撰者に抜擢されるなど（この企画も応仁の乱により頓挫）、弟雅康（宋世）や子息雅俊などの活躍もあり、室町期にあつて、飛鳥井家は歌道家として、二条・冷泉を圧倒するほどの勢力を有していた。

このように、室町時代の歌壇や和歌史は、飛鳥井家歌人を除外しては語れないといった状況にあり、彼らに関連した歌合、歌会、歌学書などは夥しく現存する。

私も長年にわたり、歌道家としての飛鳥井家に関心を抱き、折に触れて、関連資料の蒐集に務めてきたが、その整理と体系化には膨大な時間を必要とする。

飛鳥井家の歌道家の研究領域には、大きく

- (1) 歴代の飛鳥井家歌人の伝記、歌壇活動の考察
- (2) 飛鳥井家歌人の家集・定数歌類の研究
- (3) 飛鳥井家歌人の参加した、歌合、歌会の研究
- (4) 飛鳥井家歌人の歌学書の研究
- (5) 和歌関連資料を除く、飛鳥井家歌人の著作類の考察

などが考えられよう。本稿では、断片的な和歌資料が相当量に錯綜したままで現存する(3)に関連する和歌資料から、注意されるものや新出資料などを対象に取りあげ、逐次、紹介し、累代の飛鳥井家歌人の歌

道研究の一環としたい。

二

此の度取りあげる、長享二年（一四八八）七月八日、飛鳥井榮雅亭で催行された百首統歌を、「長享二年七月八日宗匠家統百首和歌」（「長享二年統百首」または、「統百首」と略称することがある）と仮称して置く。

この「統百首」は、井上宗雄氏が、榮雅主催の歌会に雅康も出詠している文明後半ころの資料として列挙された、

（文明）十八年二月廿四日・長享二年三月廿六日等の十輪院内府記・実隆公記等及び書陵部・高松宮蔵「北白川亭和歌」・長享二年七月八日宗匠家統百首和歌Ⅱ先代御便覧23所収。^{註1}
のなかで触れられたのが最初であろう。

その後、私はこの「統百首」に、正徹の愛弟子正広が出詠していることを知り、「先代御便覧」本に直接当たって調査、次のような紹介を正広伝に記述したことがある。

「宗匠家統百首和歌」は、全体、九十八首しかない。うち一首は作者名を欠くが、詠出順序から宋世のものとなる。七人の作者で十四首なら、九十八首でもよさそうであるが、各作者の詠歌を加算すると、為広15・実隆15・榮雅14・宋世14（作者名欠の一首も加える）・基綱13・正広14・桂厚14なので二首欠脱となる。欠脱のうち一首は、正広の「帰雁」の歌であることが、「松下集」で判明し、他の一首は、その「帰雁」の直前に基綱の「春曙」の歌があったろうことまで推測できる。^{註2}

これまで知られていた「先代御便覧」収録本は、二首の脱落歌のあるほか、作者を欠如したり、本文にも不審なところが所々にあり、善本とはいえなかった。

ところで近年、全体の百首が揃い、本文的にみても優れている伝本を、思いがけない資料のなかに見出した。その新出資料の紹介もかね、「長享二年統百首」を翻刻するとともに、種々な方面から考察してみたい。

「統百首」の伝本は、百首歌という小さな作品なので、独立した冊子でなく、叢書類や他の作品と合綴されるケースが多いので、ここで紹介する以外にも現存している可能性はあるが、現在、四本の伝本をつきとめている。

この四本は二つの系統に分類できるが、まずは、簡単に書誌的概要を記しておく。

第I類系統本

(1) 書陵部蔵「先代御便覧」本（「便覧本」と略称）

「先代御便覧」は、二十八冊からなる膨大な叢書で、元禄から宝永年間にかけて日野家の当主たちが記録したもので、その二十三冊目に、他の作品と合綴されている。江戸中期頃の写本で、袋綴本。一面十三行、歌一首一行書。歌題は歌の頭部、作者名は歌の脚部に記す。墨付四丁で、全九十八首。内題は「宗匠家統百首和歌」長享二七月八日」。奥書の類はない。

(2) 高松宮家蔵本（高松本）

この伝本は直接現物に当ることができないため、国文学研究資料館の紙焼写真で調査した。写本一冊で表紙左肩に「統百首和歌^{長享二年七月八日}」の題簽を貼付する。内題は「宗匠家統百首和歌^{長享二年七月八日}」。一面十二行、歌一首一行書。歌題と作者名は歌の前に記す。墨付九丁。奥書の類はない。全体九十八首。作者名を欠如した一首がある点など、「便覧本」に近似する。

(3) 井上宗雄氏蔵「類聚和歌」所収本（井上本）

井上氏の『中世歌壇史の研究室町前期（改訂新版）』の「室町前期歌書伝本書目稿」で、所在を知り、私信で井上氏に確認していただ

いた。全体九十八首ということなので、「便覧本」などと同系統と判断した。

第II類系統本

(4) 書陵部蔵「歌合」合綴本（「歌合本」）

この資料は、表紙に「内裏御會詠合」応永十四年十一月廿七日と打付け書きのある、縦二五・四糎、横一八・九糎の袋綴写本一冊に合綴されている。本文料紙は楮紙で、江戸初期頃の書写。「内裏御會詠合」応永十四年十一月二十七日内裏歌合」ほか六つの和歌作品が合綴され、その最後に、内題もなく、この「統百首」が収められている。この部分の墨付は一丁、一面十行歌一首二行書、歌題は歌の頭部、作者名は歌二行目の下に記す。末尾に「長享二年七月八日 宗匠家会飛鳥井大納言入道／外見有間敷之由」 「夜かくし書写申候間一圓見候申ましく候」と識語がある。全体百首からなる完本。本文には若干不審なところもあるが、第I類に比べて、はるかに善本なので、本稿の末尾に翻刻する。

第I類本（便覧本・高松本）と第II類本を比較すると、次のような相違点がある。

(1) 歌の欠脱

第II類本には「春月」と「栽花」との間に、第I類本にない次の二首がある。

春曙

基綱

みるか中はしはしはかりの明ほのに千々の心をのこす春かな

帰鷹

正広

ふるさと、たのむ都もいか、せんあしもやすめ帰るかりかぬ

第I類本に基綱と正広の歌二首が欠脱していることは、かつて推測したところであるが、これは明らかに第I類本の欠脱である。

(2) 作者の問題

(イ) 第II類本は、28番の作者を「桂綱」とするが、これは「桂厚」の誤写。

(ロ) 第I類本は、74番歌の作者を「基綱」とするが、第II類本は「実隆」とする。作者の詠出順序や「雪玉集」から判断して「実隆」が正しい。

(ハ) 第I類本は、75番歌の作者を「実隆」とするが、第II類本は「基綱」とする。これも詠出順序からみて「基綱」が正しい。

(ニ) 第I類本では、79番歌「会恋」の作者を欠如するが、第II類本のように「宋世」とあるのが正しい。

(ホ) 第I類本は巻軸歌「祝言」の作者を「実隆」とするが、第II類本は「宋雅」（榮雅）とする。これも後述するように「榮雅」が正しい。

(ヘ) 第I類本は、「為広」「実隆」「基綱」の三人に、すべて「卿」を付しているが、これは第II類本のように、付さない方が本来の姿である。

(3) 配列上の相違

(イ) 第I類本では「海霞」↓「子日」の配列だが、第II類本は、逆に「子日」↓「海霞」になっている。この「統百首」の歌題は、後述するように、主として「内裏御會詠合」応永二十一年頓証寺法樂百首」のそれに依拠していることから判断すると、第I類本の配列の方が妥当である。

(ロ) 第I類本では「残鷹」↓「千鳥」の配列だが、第II類本は逆に「千鳥」↓「残鷹」となっている。これは(イ)と同様な判断で第II類本の方が妥当である。

(4) 歌本文の異同

⑮	⑭	⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	番号
八五	七七	七五	六六	六六	六三	六〇	五六	五三	五〇	四八	三〇	二七	二七	二四	歌番号
旧恋	契恋	尋恋	庭雪	庭雪	残鴈	寒芦	初冬	擣衣	湖月	崎霧	夏草	沼蒲	沼蒲	郭公	歌題
たのみにて	いつはた人を	われなくも	たえぬをも	とへかしな	春はとく	沢へのあしも	風のたよりを	すむ身のための	月をもてきて	又もおほふや	しけりかりそな	ひきそわかるゝ	なかきねの	あきし世の	第I類本本文
たのみにや	いつかた人を	わりなくも	たえぬとも	問かしの	春をとく	さはへのあしの	風のつかるを	すみ身のための	月をめてきて	またもあふせや	しかなかりそな	ひきてわかるゝ	なかきねに	ありし代の	第II類本本文

⑮	⑭	⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	⑮
八六	九〇	九二	九三	九四	九五	九六	九六	九六	九五	九四	九三	九二	九一	九〇	八六
山家	羈旅	野宿	故郷	眺望	述懐	懐旧	懐旧	懐旧	蕭寺	祝言	祝言	祝言	祝言	祝言	祝言
いつかたか	関こゆる	明かたの山	先そしる	あしたはきえて	なにやのこさん	老をとかすは	老をとかすは	たとへはかへる	我身のさまを	君をいはへは	かきり有けり	かきり有けり	かきり有けり	かきり有けり	かきり有けり
いつくにか	関すゆる	あけかたの空	まつはしる	あしては消て	名にや残らん	老をとめすは	老をとめすは	たとへてかへる	我身めさます	君をねかへは	かきりありけり	かきりありけり	かきりありけり	かきりありけり	かきりありけり

*第I類本の本文は、「便覧本」と「高松本」に共通する異文に限つた。この両本相互の異文もあるが、それはとりあげていない。ここに列挙した本文異同は、各作者による改作などによつて生じたものではなく、すべて書写階梯における誤写、誤読によるものであろう。この二十六箇所のうち、第I類本の方が妥当と思われるものは⑦⑪⑫⑲程度であり、他は第II類本の本文が優れているか、第I類本でも第II類本でも意味が通じ、早急に判定しえない性格の異文である。以上、種々な方面から検証してきたように、第II類の「歌合本」は

第I類本の欠脱した二首が存在するだけでなく、作者、本文などからみても優れた伝本と確認できる。

三

「長享二年統百首歌」には、為広(宝徳二年—大永六年)、栄雅(応永二十三年—延徳二年)、宋世(永享八年—永正六年)、実隆(康正元年—天文六年)、基綱(嘉吉二年—永正元年)、正広(応永十九年—明応二年)、桂厚(生没年未詳)の七名の歌人が出詠している。

この七人の著作類に当り、「統百首」の成立に関連する記事を抽出すると、まず、「実隆公記」の長享二年七月五日の条に、「自飛鳥井大納言入道許百首統百題十四首來八日□□遺之由有使者」が見出され、さらに正広の家集「松下集」の長享二年七月八日の条にも、

飛鳥井重相より、七夕後朝とて百首法樂七人して十四首つ、よみ侍とて、題を送給ふ、いなみかたくて詠し侍る、人数飛鳥井権大納言栄雅、冷泉中納言為広、飛鳥井中納言宗世、三条侍従大納言実隆、姉小路宰相基綱、桂厚、正広

と詳細な詞書があり、それに続いて自詠の提出歌十四首を収めている。以上の二つの関連記事と「歌合本」奥付の「長享二年七月八日 宗匠家会飛鳥井大納言入道」などを突き合せると、「統百首」の成立過程は、およそ次のようにならうか。

まず、宗匠である栄雅が、この「統百首」を主催、勸進し、七月五日頃、各歌人のもとに使者を派遣、百首の企画と十四首宛の歌題を送付、七月八日までに提出を懇望したようである。この依頼は、数日後に詠草提出を催促したあわたたしいものであった。提出期限を七月八日に設定したのは、「松下集」により、「七夕後朝」を企図したためであることが諒解できる。してみると、作者を七人にしたのも「七夕」の数字と符合させる配慮によるものであったとみてよい。この「七夕

後朝」の設定は、後述するように、各歌人の詠歌内容にもかかわりがある。

また、提出歌百首がまとめられたのは、栄雅亭であつたらうが、各作者は栄雅亭に一堂に会したのではなからう。「実隆公記」の七月八日の条をみても、飛鳥井亭に向つた記事はなく、正広の場合も和歌だけ提出したように思える。七人のうち、二、三人は披講の場にあつたかもしれないが、他の作者は、与えられた歌題に即して短冊で提出したのではなからうか。短冊と推測したのは、「歌合本」の和歌一首の書式が、「立春」で例をとれば、

立春

こゝろのミくはりし衣の色にそみ
にほひにうつる春は來にけり 為廣

と、歌題や作者名の位置、歌一首二行書と、当時の短冊のそれと同じになつてゐるからである。その点でも、第II類本の「歌合本」は、原本に近い姿を伝えてゐると思われる。

七人の歌人は、文明末頃から長享にかけての有力歌人である。文明後期の歌壇で「宗匠」といえば飛鳥井栄雅であり、当時すでに七十三歳の長老で、歌壇の重鎮的存在であつた。宋世はその弟雅康の法名、栄雅とともに飛鳥井家を代表する歌人で、当時五十三歳。他方、為広はまだ三十九歳だったが、上冷泉家を支えていた歌人で、栄雅も彼に敬意を表して、巻頭歌を詠出させている。三条西家の実隆(三十四歳)と姉小路家の基綱(四十七歳)の二人も、当代の代表的な文化人、公家歌人として堂上歌会でも活躍していた。この中には、いわゆる二条家歌人がみえないが、為重の息子為右は義満に誅殺され、その後、為遠の子息為衡などが残つたが、すでにこの頃は血統も絶えていた状況にあつたため、特に二条派歌人を排斥したためではない。

七人の歌人のなかで看過できないのは、在野の歌人の正広と桂厚の

参加である。正徹の愛弟子正広は招月庵を継承し、この当時、地方大名の信頼厚く、歌人としての名声があった。時に七十七歳の老齡。桂厚は正広の弟子筋にあたり、「正広日記」によると、正広と東国の旅に同伴したり、文明十一年四月二十六日の「崇徳院法樂百首」や正広が判者となった「文明十三年三月十八日歌合」などにも出詠している。正広のように在野を代表する歌人ではなかったが、正広の弟子ということで依頼を受けたのであろう。

七人の顔触れは、飛鳥井家二人、冷泉家一人、三条西家一人、姉小路家一人、冷泉派の流れを汲む在野歌人二人という構成になる。かなり広範囲に呼びかけているとみてよい。

「続百首」の七人の歌人の詠出順序を見ると、巻頭歌「立春」は為広が詠じている。これは先述したように彼を主賓扱いとした栄雅の配慮である。巻軸歌は主催者の栄雅が詠じている（第I類本が「実隆」とするのは誤認）。他の部分は、原則として、栄雅・宋世・為広・実隆・基綱・正広・桂厚の順序に配列されているが、これは官職や身分を考慮している。

七人の歌人の詠歌数は、宋世・実隆・基綱・正広・桂厚の五人は各十四首、栄雅と為広が各十五首、合計して百首。主賓格の為広と主催者の栄雅が一首多く提出している。

四

「続百首」の四季・恋・雑の歌数と百首歌題構成は次のようになっている。

- 春二十首（立春～暮春）
- 夏十五首（首夏～夏祓）
- 秋二十首（早秋～暮秋）
- 冬十五首（初冬～歳暮）

恋十五首（初恋～旧恋）

雑十五首（山家～祝言）

この四季・恋・雑の歌数配分は、この当時の百首歌によくみられる典型的なもの。一方、百首歌題構成に関し、諸々の百首歌を探索してみたが、そこで浮上してきたのが、応永二十一年（一四一四）の「頓証寺法樂百首」（続類従巻三八四）である。この百首法樂歌は、飛鳥井宋雅・冷泉為尹・細川道欽・正徹・堯孝など当時の公武僧にわたる著名な歌人四十余名を結集し、崇徳院二百五十年遠忌のために催行されたものである。

ここで続類従本「頓証寺法樂百首」の歌題構成と比較すると、歌題及び配列は、二つの歌題を除き、他はすべて一致する。二つの歌題とは、雑部後半の、97・98首目で、続類従本は、「夜燈」（97）、「舊寺」（98）とあるのに対し、「続百首」は、「哀傷」（97）、「蕭寺」（98）と相違する。頓証寺に奉納されている飛鳥井宋雅筆の「頓証寺法樂百首」で見ると、98は「蕭寺」とあるので、続類従本の誤認とみてよいが、「夜燈」と「哀傷」の不一致は不審である。

けれども、この一箇所の不一致だけで、両百首が無関係とするのは早計である。「頓証寺法樂百首」の歌題構成と九十四箇一致する、正徹の応永二十七年、永享十二年の百首（「草根集」巻一）など、述懐・懐旧・哀傷・蕭寺となっており、「夜燈」を「哀傷」に変える方が前後の歌題内容からみて妥当と判断し、他はすべて「頓証寺法樂百首」に依拠したもののみなされる。

この法樂百首は、安富宝密の沙汰により、足利義持の執奏で催行されたものだが、その巻頭歌も宋雅が詠み、奉納の一巻も彼が自筆で記しているように、大きく関与していた。おそらく、百首歌題設定も宋雅による可能性が強い。してみると、この百首歌題構成は、飛鳥井家歌人宋雅が晴れの場に提出したものとなり、その孫の栄雅が規模にした背景も納得されよう。

次に七人の歌人の家集類などに、この「続百首」の歌がどのような取り扱われているか、この方面から辿ってみたい。

七人の歌人のうち桂厚を除き、他の六人には、家集あるいはそれに類する和歌資料が現存する。

まず、為広には、「為広詠草」(Ⅰ)、^註「為広卿詠」(Ⅱ)、「為広詠草」(Ⅲ)などの詠草があるが、そこに「続百首」の歌は見出せない。義尚の和歌が混入している「前大納言為広卿集」(続類従巻四三三)にも、同様に一首もみえない。また、宋世の「雅康卿詠草」にも収載されていない。

一方、栄雅には「雅親詠草」(Ⅰ)、「飛鳥井雅親集」(Ⅱ)、「亜槐集」(Ⅲ)、「続亜槐集」(Ⅳ)、「雅親詠草」(Ⅴ)の詠草類があるが、「続百首」の歌は、「続亜槐集」に十四首(四二・五二・八九・一二七・一六四・一八一・二〇四・二四四・二七八・二九八・三一八・三二九・三四四・四一六)収録されているが、巻軸歌の「祝言」の歌だけは未収録。未収録の原因は、第Ⅰ類本系で「実隆卿」となっていたため、この事實は、「続亜槐集」が編纂の際に対象とした「続百首」は第Ⅰ類本系統の伝本であったことを示唆している。因みに「続亜槐集」は他撰である。

基綱には「卑懐集」(Ⅰ)、「基綱卿詠」(Ⅱ)の家集があるが、「続百首」の歌は「基綱卿詠」(Ⅱ)の方に十三首(五・三一・四三・五二・六五・七三・一〇九・一二八・一四二・一四七・一五四・一八三・二〇五)収録されており、一〇九番の歌以外は、いずれもその歌の左肩に「長享二七八続百首」の注記が付加されている。十四首提出したのに十三首しかないのは、すでに触れたように、第Ⅰ類本で欠脱していた基綱の「春曙」の歌が収められていないからである。この事実からみても、「続亜槐集」同様、「基綱卿詠」が対象とした「続百首」の伝本は、第Ⅰ類本であったとみなされる。このことは、一四七番に「見恋」の歌を掲載するが、これは、第Ⅱ類本のように「実隆」とあるの

が正しいのに、第Ⅰ類本が誤って「基綱」としているのに依拠したことによっても裏付けられる。「基綱卿詠」は自撰か他撰か未詳とされているが、実隆詠を基綱詠と入集させていることから、他撰であった可能性が強いといえる。

実隆には「再昌草」(Ⅰ)、「雪玉集」(Ⅱ)、「邦忠親王御筆集雪追加」(Ⅲ)などの詠草があるが、「続百首」の歌は「雪玉集」の方に十四首(八六・二九〇・五七四・七四七・八一五・九九七・一〇八二・一三八三・一五九七・一七四九・一八四五・一九一九・二三二五・二四四一)収録されている。「雪玉集」が編纂対象とした「続百首」の伝本は、例の「見恋」の歌を実隆詠(二八四五)として入集しているので、第Ⅱ類本系統の可能性が強い(但し、この歌に限り、右肩に「文明三十二廿点取」という注記がある)。

各家集の一致歌との関連で一番問題があるのは、正広の家集「松下集」である。「松下集」の詞書はすでに引用したように、この「続百首」の成立事情を察知するうえで貴重なものであったが、そこに掲載されている十四首(一三一五・一三二八)の本文を「続百首」と比較してみると、異文が著しい。第Ⅱ類本と比較して異文のないのは、六二・一三一五・六二二・一三三三・六九二・一三三四・八三二・一三二六・九〇二・一三二七・九七二・一三二八の六首だけで、他は大なり小なりの異文がある。それも単なる異文ではなく、例えば次に列挙するような大幅なものである(前歌が「続百首」、後者が「松下集」)。

帰鷹

① ふるさと、たのむ都もいか、せんあしもやすめす帰るかりかね(十三)
古郷と都をなせるやすらひにあしもやすめす帰る鷹かね(一三二一六)

暮春

② 雲となり雨とふるともかたみかはしたは、とまれ夕くれの春 (二一〇)
したへとも春はとまらて帰る雲朝にのこれ形見ともみん (二二一七)

路薄

③ 河内めかこれや手染のいとす、き露ふきみだす秋しの、さと (四一)
河内女かこれや手染の糸薄風に露ちる秋篠の里 (二二二〇)

崎霧

④ ほともなき霧の戸張の明る夜にまたもあふせや星さきの松 (四八)
崎松
きのふかも霧の戸張をけさ出て又もあふせや星崎のまつ (二二二二)

析恋

⑤ 我こ、ろしめちとたのむ原の露なみたとなりて袖に出らん (七六)
我心しめちとたのむ原の露涙とならば袖やはらはん (二二二五)

これらの異文は誤写によって生じるものではなく、正広自身の改作によるものであろう。②など惜春の心は同じでも大幅に改作しているし、④などにいたっては、詠歌の主題が「星さきの松」にあるためか、わざわざ歌題の方も「崎松」に変えている。正広の、「三百六十番自歌合」などをみても、彼はしばしば改作を続けた痕跡が辿られるが、ここも「松下集」に収録した本文の方が、改作後のそれを示しているのとみてもよい。その意味でも「続百首」との比較を行なうのは興味深い。

五

「長草二年続百首」の企画目的は、「松下集」によると「百首法楽」であったとするが、いかなる寺院への法楽か明徴がない。また、和歌にも、いわゆる「法楽」の雰囲気は稀薄である。

けれども「七夕後朝」の七月八日に和歌を召したとすれば、いわゆる寺院の神仏への法楽ではなく、七夕行事の一環として、牽牛星と織女星の二星に奉納し、もって二星の後朝の悲哀の心情を鎮魂させたい意図があったのかもしれない。

「七夕後朝」の歌題歌をみると、別れの際の二つの星の悲痛な心が主題とされているが、とりわけ

(七夕後朝の心をよみ侍りける)

むつこともまだつきなくの秋風にたなばたつめやそでぬらすらん

(新勅撰集・秋上・八条院高倉・二一九)

七夕後朝の心を

たち帰るけさの涙に七夕のかざしの玉の敷やそふらん

(続拾遺集・秋上・顯昭・二二二)

と、離別の辛さとして織女星の悲しみがクローズアップされる。そういった観点から、この「続百首」を味読すると、女性が種々な姿をとって登場してくることに気付く。これは偶然のこととは思われない。

山霞

長閑なる春のかすみのころもをばなに山ひめのたちかさぬらん (宋雅・2)

岸柳

朝なくししの顔にかゝる髪やかぜのけづれる青柳の糸 (宋世・9)

春雨

さほ姫やあまつ空にもをだ巻の糸くり返しながめふるらん (為広・10)

更衣

さむしろうにかた数袖も立ちかへば春のわかれやうぢのはし姫 (宋雅・22)

路薄

河内めかこれや手染のいとす、き露ふきみだす秋しの、さと (正広・41)
などの歌には、女性のイメージが喚起され、さらに、織女星が糸をも

って布を織ることと関連するかのようには、糸・衣・袖などが詠みこまれている。

「七夕」歌題歌の

いま一夜ねてもゆかなん天の川二つのほしのまへのたなはし（宋世・37）は、当然、七夕伝説が主題となるが、「綺霧」の

ほどもなき霧の戸張の明る夜にまたもあふせや星さきの松（正広・48）などにいたっては、地名の「星崎」を七夕と関連付けている。女性の姿が表面にでていないものも、

暮春

雲となり雨とふるともかたみかはしたはゞとまれ夕ぐれの春（正広・20）の歌は、「高唐賦」にみえる楚の襄王が昼寝をして巫山の神女に遇ったという故事を踏まえている。

このように与えられた歌題は「七夕後朝」と直接関係はなくても、歌人たちは、「七夕後朝」の雰囲気にかかわる歌を添えていたように思われる。これは「続百首」の著しい特色といえる。

「続百首」は日程からみて、かなり倉卒の間に創作したこともあつてか、瞠目すべき秀歌は見当らないが、着目してよい歌を少し列挙してみよう。

春月

月にあかぬなげきは秋のさやかなる空だにあるを春のあけぼの（実隆・11）

夏月

秋だにもあかぬころにくらぶればなにぞは月のみじか夜の空（為広・31）これらの歌は、春の月や夏の月を見飽きるまで眺められない嘆息を、秋の長夜の澄みきった月と対比して詠じたもので、一種の美意識の提示にも通い興味深い。

若菜

雪こほりきゆる沢辺の水かくれにあらはできよきねせりつむ也（基綱・5）

早苗

みなと田や海のはま藻をかるあまもおなじみどりのさなへとらし（基綱・26）

首夏

花の香にそめし衣も夏のきてうすきにとをる袖の朝風（桂厚・21）などのように、印象鮮明で爽やかな感覚を触発する歌も散在する。

この稿は、飛鳥井家歌人の和歌資料の考察を庶幾するものなので、最後に、飛鳥井家歌人の栄雅と宋世の和歌に触れておく。

当時、宗匠と尊崇されていた栄雅の歌には、さすがに巧妙な手法に貫かれた歌がある。

夜梅

色もみずねやもる音もきこえねど目をさましたる夜半の梅が、（栄雅・8）この歌は、上句が説明的で余情には乏しいが、視覚と聴覚の刺激がないのに目を覚めた原因を、梅香に求めて奇抜である。梅香の刺激で覚醒した行為を通して、いかに夜の梅香が馥郁たるものであるかを言外に暗示すると同時に、梅香に目を覚ます風流人の心も示唆して巧妙である。

翫花

かぎすにはおしむ心やまけぬらんおもひわびても手折花かな（栄雅・15）

この歌も説明的だが、花を手折って頭に挿したい気持と、手折らずに眺めていたい気持の相克を提示、結局、かぎしたい気持が勝って手折る、その時の心情を「おもひわびても手折」と発想したのが斬新である。

また、

夕立

夕だちの跡の山風又おちてひとしきりふる露の木の下（栄雅・29）

時雨

夕づく日さすや外山の棋の葉にかたへしぐる、色ぞさびぬる（栄雅・57）といった叙景歌も、印象鮮明な描写のなかに知的な趣向を凝らす。前

の夕立の歌は、夕立が去った後、山風が吹いて木々の葉にやどつていた露を吹き落とすので、再び雨が「しとしきりふる」ととらえたり、後の時雨の歌は、槇の木を中心に置き、時雨と「夕づく日」を配して、「かたへしぐる」と描写しあたりに、意匠を凝らす。

更衣

さむしろにかた敷袖も立かへば春のわかれやうぢのはし姫 (栄雅・22)
これは「さむしろに衣かたしきこよひもや我をまつらむうぢのはしひめ」(古今集・恋四・よみ人しらず・六八九)の歌を背景にするが、橋姫が長く片敷していた袖を「更衣」の時期にかえる場面を想定、恋人の香の染みだ袖をかえるのは、さぞや辛いだろうと推測して奇抜。しかも袖の關係で「立つ」(裁つ)、「春」(張る)が縁語となり、「うぢ」に「憂し」を掛け、修辭面でも工夫を凝らしている。

因みに長享二年に、栄雅はすでに七十三歳の老齡であつた。結局、この二年後に死去するが、

早秋

老が身のあか月おもふ秋はきぬまだながらぬ夜半にねざめて (栄雅・36)

湖月

舟人もしらぬおきなかかみやまかけなる浪の月をめできて (栄雅・50)

前歌は秋の夜の老の寢覚めのわびしさを、後歌は、

おほかたは月をもめでしこれぞこのつもれば人のおいとなるもの

(古今集・雑上・業平・八七九)

鏡山いざ立ちよりて見てゆかむ年へぬる身はおいやしぬると

(古今集・雑上・よみ人しらず・八九九)

などの著名な歌を背景に、風流韻事のうちに年老いた身を嘆息する。

栄雅の歌は、このように相当に手足れた手法を駆使したものが多く、一方、弟の末世の和歌には、栄雅のような熟練した巧妙さは、やや稀薄である。一つの特徴としては、次のような本歌取による軽妙な詠法が指摘できようか。

七夕

いま一夜ねてもゆかなん天の川二つのほしのまへのたなはし (宋世・37)
この歌は、「七夕後朝」の立場で詠じており、「一夜」と「二つ」で数字の妙を配し、

またといはばねてもゆかなむしひて行くこまのあしをれまへのたなはし

(古今集・恋四・よみ人しらず・七三九)

を本歌にする。本歌の「こまのあしをれ」を背景にしているため、発想が洒脱になつてゐる。また、

けふしなばあすまでもはおもはじとおもふにだにもかなはぬぞうき

(後拾遺集・恋四・西宮前左大臣・八一二)

を本歌とする、

忍恋

おもはじと思ふも身にはかなはねばしのお心もわれにまかせじ (宋世・72)
の歌なども、内容が深刻なわりには、本歌との関連もあり、調べが軽快である。

こういった傾向は、

会恋

人めよく新手枕のすきまあらば身はならはしに又もとはなむ (宋世・79)
た枕のすきまの風もさむかりき身はならはしの物にぞ有りける

(拾遺集・恋四・よみ人しらず・九〇一)

山家

すみうくは又いづくにか宿かへんとおもふに山のおくもとはれず (宋世・86)
ひぐらしのなきつるなへに日はくれぬと思ふは山のかげにぞありける

(古今集・秋上・よみ人しらず・二〇四)

の二組の本歌取歌でもいえる。主題とするものは、決して軽々しいものではなく、苦悩を含むものだが、独特の軽快な諧調のためか、洒脱

なよみぶりになっている。このほか、

落葉

山かぜやよその紅葉をかしは木の木ずまもあらぬ色に出ぬる (宋世・58) のように「柏木」に「借し」を掛け、常緑のはずの柏木が紅葉したという仮想的な叙景歌、

卯花

をの、えはよそにぞ聞しつづき原此比くたす花の雨かな (宋世・23) といった晋の王質の故事を踏まえ、長雨に朽ちる卯木を詠じたものな どが印象に残ったが、いわゆる、静かな寂寥さをたたえた歌といったものは見当らなかった。

以上、「長享二年統百首」の和歌、特に飛鳥井家の二人の歌に触れてきたが、最後に「統百首」を翻刻しておきたい。

凡例

「長享二年統百首」を次の方針によって翻刻した。

- (1) 底本には、第二類系統本の、書陵部蔵「歌合本」を選び、明らかに誤謬に限り、第一類系統本をもって校訂した。校訂箇所は、「〔 〕」で示し、後に原本との関係を指摘した。
- (2) 漢字・仮名の別、仮名遣い、送り仮名などはすべて底本のままとしたが、漢字は原則として現行漢字に、変体仮名は通行の字体に改めた。
- (3) 底本では、歌題は歌の頭部、作者は和歌本文の末尾、一首二行書となっているが、紙幅の都合もあり、和歌を一行書きにし、歌題と作者名は歌の前に出して翻刻した。
- (4) 歌の頭部に、算用数字で通し番号を付した。

〔長享二年七月八日宗匠家統百首和歌〕

立 春

- | | | | | |
|-----|------------------------------|-------|-----|-----|
| 1 | こゝろのみくはりし衣の色にそみにほひにうつる春は来にけり | 山 霞 | 栄 雅 | 為 広 |
| 2 | 長閑なる春のかすみのころもをはなに山ひめのたちかさぬらん | 海 霞 | 実 隆 | |
| 〔3〕 | 難波かたなにはの物かみをつくしうみよりふかきはるの霞に | 子 日 | 宋 世 | |
| 〔4〕 | あつき弓ひきくらふれば春の野にすゑはるかなる松の色かな | 若 菜 | 基 綱 | |
| 5 | 雪こほりきゆる沢辺の水かくれにあらはてきよきねせりつむ也 | 朝 鶯 | 正 広 | |
| 6 | 打出る声に岩戸はあけにけり神世もかくや春のうくひす | 津 梅 | 桂 厚 | |
| 7 | 花を世にめてこし人も難波津に春やむかしと梅か香そする | 夜 梅 | 栄 雅 | |
| 8 | 色もみすねやもる音もきこえねと目をさましたる夜半の梅か、 | 岸 柳 | 宋 世 | |
| 9 | 朝なくししの類にかゝる髪やかせのけつれる青柳の糸 | 〔春 雨〕 | 為 広 | |
| 10 | さほ姫やあまつ空にもをた巻の糸くり返しなかめふるらん | 春 月 | 実 隆 | |
| 11 | 月にあかぬなけきは秋のさやかなる空たにあるを春のあけほの | 春 曙 | 基 綱 | |
| 12 | みるか中はしはしはかりの明ほのに千々の心をのこす春かな | 帰 鴈 | 正 広 | |
| 13 | ふるさと、たのむ都もいか、せんあしもやすめ帰るかりかね | 栽 花 | 桂 厚 | |

14	色もかもうつしうへをく庭の花もわするな行すゑの春 翫花	栄雅	28	五月雨に水かさまさりて早川やくたけておつる滝の岩なみ 夕立	栄雅
15	かきすにはおしむ心やまけぬらんおもひわひても手折花かな 惜花	宋世	29	夕たちの跡の山風又おちてひとしきりふる露の木の下 夏草	宋世
16	ちるきはにしたふ心よあやにくにはな見ぬ春の日をはをくれと 春駒	為広	30	みま草にしかなかりそな秋まちて露かふむしの宿りとそなる 夏月	為広
17	春といへは老ぬる馬もこまかへる心の色や野へのわか草 款冬	実隆	31	秋たにもあかぬこゝろにくらふれはなにそは月のみしか夜の空 瞿麦	実隆
18	これのみや春のかたみと驚のなく夕かけの山吹のはな 紫藤	基綱	32	ちらすしてさきつくよりや常夏の久しき花の名にしおふらん 氷室	基綱
19	あかすみる心千尋の藤なみに花のうき瀬の色そあせゆく 暮春	正広	33	歳さむきときはのかけの松かさき夏のひむろも守やそめけん 納涼	正広
20	雲となり雨とふるともかたみかもしたは、とまれ夕くれの春 首夏	桂厚	34	松かもといはまの水にまとひして花こそなけれども、のさかつき 夏祓	桂厚
21	花の香にそめし衣も夏のきてうすきにとをる袖の朝風 更衣	栄雅	35	をちこちやいく里人そみそき川心きよむるそでの夕なみ 早秋	栄雅
22	さむしろにかた敷袖も立かへは春のわかれやうちのはし姫 卯花	宋世	36	老か身のおか月おもふ秋はきぬまたなか、らぬ夜半にねさめて 七夕	宋世
23	をの、えはよそにそ聞しうつき原此比くたす花の雨かな 郭公	為広	37	いま一夜ねてもゆかなん天の川二のほしのまへのたなはし 稲妻	為広
24	ありし代の魂のゆかりとおもふにも猶うとまれぬ山ほと、きす 砌橘	実隆	38	うつり行世の事草のしら露にあたらへするいなつまのかけ 籬萩	実隆
25	ほと、きすをのか床よの木すゑそとうへしはしるや庭のたち花 早苗	基綱	39	ぬれつ、もそよきにけりな露と風あひやとりする庭の萩原 野萩	基綱
26	みなと田や海のはま藻をかるあまもおなしみとりのさなへとるらし 沼蒲	正広	40	ま秋はら鹿の音さむく露ちりて色にしくる、野への秋かせ 路薄	正広
27	なにをさてぬまのあやめのななきねになかきためしもひきてわかる、 梅雨	桂(厚)	41	河内めかこれや手染のいとす、き露ふきみたす秋しの、さと 暁露	桂厚

42	秋さむくおき出てみればあり明の月に玉ちるあさちふの露	榮雅	56	落葉する風のつかるを今朝はまつ空にしらせて冬やきぬらん	榮雅
43	うへてみる人もきてみよ朝日さすまかきのにしにのこるあさかほ	宋世	57	夕つく日さすや外山の槇の葉にかたへしくる、色そさひぬる	宋世
44	葛風 秋かせにうつろふ比はま葛はら花もうらみてちるかとおも	宋世	58	山かせやよその紅葉をかしは木の木すゑもあらぬ色に出ぬる	宋世
45	夕鹿 うき雲はしくれて帰る山路より出て夜をまつさをしかの声	為広	59	枯野 冬かれの色にもみてよもえ出しひきの、黒葛末つるのよを	為広
46	初鴈 ちきるともかはかりこそは待つけめ秋をたかへすかりのくる声	実隆	60	寒芦 たつのなく霜のいく夜をかきねきてきはへのあしのしほればつらん	実隆
47	叢虫 こぬ人をねになく虫にかこたせてすむも浅茅か宿の露けさ	基綱	61	井氷 底ふかき水のけふりは長閑にて井つゝに「す」かるたるひをそみる	基綱
48	崎霧 ほとみなき霧の戸張の明る夜にまたもあふせや星さきの松	正広	62	千鳥 うき世をははなれ小鳴になく千鳥友なしとてや声うらむらん	正広
49	嶺月 秋毎にすみのほる月を鏡にてくもりなき世をみねのまさかき	桂厚	63	残鴈 春をとくさそおもふらん雪のうちのさむき田面の鴈のなく声	桂厚
50	湖月 舟人もしらぬおきななか、みやまかけなる浪の月をめてきて	榮雅	64	網代 後の世をなけくなみたは露もあらし袖のみぬれてあしろもるとも	榮雅
51	関月 いてやらぬこよひの月の宮人は岩戸の関に名をやとむらん	宋世	65	寒月 空はれてさえぬるよりも霜くもり雪けしられてむかふ月かな	宋世
52	浜菊 はま松はをとのみたかきうら波を色にみせたる花のしら菊	為広	66	庭雪 問かし「な」こゝろのみちはたえぬともわけすはしらし庭のしらゆき	為広
53	擣衣 うつ袖もさこそはせはき草の庵にす「む」身のための衣なりせは	実隆	67	炭籠 おきなさひすみやくさとの煙にもかしらの雪そまかふ色なき	実隆
54	黄葉 さほ山の木すゑはまたみとりにては、そはかりの四方のはつしほ	基綱	68	埋火 さゆる夜におとろかされて埋火を我もいくたひかきおこすらん	基綱
55	暮秋 うき物といとふま秋 <small>は秋</small> やいなはやまよしたちかへれ松もこそあれ	正広	69	仏名 法師の三世の仏をとなふるにみな清まはる雲のうへ人	正広
	初冬	桂厚	歳暮		桂厚

- 70 さえぬへき春のためにも年木きるみ山の雪の跡をもとめて
初 恋 栄 雅
- 71 まよふとは聞しに似たるおもひにてけふよりしらぬ恋のはてかな
忍 恋 宋 世
- 72 おもはしと思ふも身にはかなはねはしのふ心もわれにまかせし
聞 恋 為 広
- 73 わりなしやそれとみぬめのうら風の音にもなみのかゝるたもとは
見 恋 実 隆
- 74 ことかはし手をとるほとみなき中はかつみるにしもそふおもひかな
尋 恋 基 綱
- 75 わりなくもとはれし里のをれのみ身をあらぬ世に住やかへけん
祈 恋 正 広
- 76 我がろしめちとたのむ原の露なみたとなりて袖に出らん
契 恋 桂 厚
- 77 たのめてもいつはた人をあひみてんしるしもあれな杉のした道
待 恋 栄 雅
- 78 待暮にうつりかねたる時のかすとはれて後とおもはましかは
会 恋 宋 世
- 79 人めよく新手枕のすきまあらは身はならはしに又もとはなむ
別 恋 為 広
- 80 又こんのこの葉もかなわかれ路にみたれこゝろのつかねをにせん
顯 恋 実 隆
- 81 世やはうき人もなき名はいひたてした、我からのおもひなるらん
稀 恋 基 綱
- 82 其まゝにさてやかれぬとおもふ人のとたえしうきはとふにまきれぬ
絶 恋 正 広
- 83 なから江やわたらぬ中の橋はしらなをなみかくるほとそはかなき
怨 恋 桂 厚
- 84 露なから玉まく葛も我ゆへのうらみにしほる袖の秋かせ
旧 恋 栄 雅
- 85 玉かつらかけにみゆるをたのみにやこゝろなかさもとし月の空
山 家 宋 世
- 86 すみうくは又いつくにか宿かへんとおもふに山のおくもとはれす
田 里 為 広
- 87 麥かきいねこきたれて世は秋になりはれしるき民の宿かな
閑 居 実 隆
- 88 塵のうちのちりのほかなるすまひ哉わかかけかくすむくらよもきふ
離 別 基 綱
- 89 とゝまらん身のうき草よあかたみにさそふ水たになきわかれちは
鞆 旅 正 広
- 90 関すゆる人もこそあれあふさかや行もかへるもしるへする月
海 路 桂 厚
- 91 よる鳴はいづくなるらんやすからぬその身を浪にいつる舟人
野 宿 栄 雅
- 92 ふかき山の旅ねならねと鳥の音もきこえぬ野へのあけかたの空
故 郷 宋 世
- 93 まつはしるむくらの門のさしなから人のこゝろもあれてすむとは
眺 望 為 広
- 94 うき雲のあしては消て浪の上のこる絵しまの月の有明
述 懐 実 隆
- 95 おもひとるこゝろたになき身のはてはうきをもすてぬ名にや残らん
懐 旧 基 綱
- 96 なにかせん老をとめすはしのふ世にたとへ「は」かへるむかしありとも
哀 傷 正 広
- 97 むさし野やはしめもはてもしら露の消てやとれる月もはかなし
蕭 寺 桂 厚

98 法をきくこゑにはあらでいたつらに我身めさます暁のかね

瑞 籬

為 広

99 いのるてふ道をた、すのみつかきやへたてぬ神のこゝろなるらん

祝 言

(〔栄〕) 雅

100 えそしらぬ君をねかへはさ、れ石にたとへていふもか〔き〕りありけり

長享二年七月八日 宗匠家会飛鳥井大納言入道

外見有間敷之由 [] 一夜かくし書写申候間一圓

見候申ましく候

〔校訂〕

(1) 原本に表題はないが、仮題を記した。

(2) 3番と4番は、原本では逆になっているが、第一類本で校訂した。

(3) 10番の歌題は、原本では「雨_レ春」となっているが、正した。

(4) 28番の作者は、原本では「桂綱」とあるが、第一類本で正した。

(5) 53番の第四句は、原本で「すみ身のために」とあるが、第一類本で校訂した。

(6) 61番の第四句、原本では「井つ、にかる」とあるが、第一類本でもって「す」を補った。

(7) 66番の初句は、原本で「問かしの」とあるが、第一類本で校訂した。

(8) 96番の第四句、原本では「たとへてかへる」とあるが、第一類本で校訂した。

(9) 100番の作者は原本で「宋雅」とあるが、「栄雅」に正した。

(10) 100番の第五句、原本では「かさりありけり」とあるが、第一類本で校訂した。

注1 『中世歌壇史の研究室町前期(改訂新版)』

2 拙著『正徹の研究(中世歌人研究)』

3 『私家集大成(中世Ⅳ)』に依拠、ただし、原本に当り、誤植を訂正。

4 書陵部蔵本。

5 京都大学附属図書館蔵本。『中世歌合集と研究(下)』に翻刻。

6 作品の下の番号は、『私家集大成』のそれ。本文、歌番号も、特記しないものは、いずれも『私家集大成』に依拠する。以下の作品も同じ。

〔付記〕「歌合本」の翻刻を御許可くださった書陵部と御家蔵本に関して御教示くださった井上宗雄氏に対し、各々に深謝します。

(昭和六十二年七月十五日受理)